



<日本雁を保護する会・山階鳥類研究所同時発表>

絶滅から復活した絶滅危惧種シジュウカラガンの渡り経路と繁殖地を初めて明らかにしました

- ・ 日本雁を保護する会（呉地正行 会長）と山階鳥類研究所（小川博 所長）は、2021年12月に秋田県で捕獲し、発信器を装着した絶滅危惧種のシジュウカラガンが、宮城県で越冬したのち、千島列島の繁殖地へ渡り、2022年10月から2023年4月にかけて再び日本に帰還、越冬したことを確認しました。
- ・ 日本雁を保護する会らの長年の活動により、シジュウカラガンの日本に渡来する個体群は絶滅から復活し、個体数が増加してきましたが、その正確な繁殖地と渡り経路は不明でした。この研究の発信器追跡によって、正確な繁殖地と渡り経路の情報が明らかになり、今後の適切な個体群管理が進むことが期待されます。

※本研究は富士フィルム・グリーンファンド、サントリー世界愛鳥基金、経団連自然保護基金の助成を受けて実施しました。

※日本雁を保護する会は、日本に渡来するガン類の研究と保全についての功績が認められて2022年7月に第22回山階芳麿賞を受賞しました。

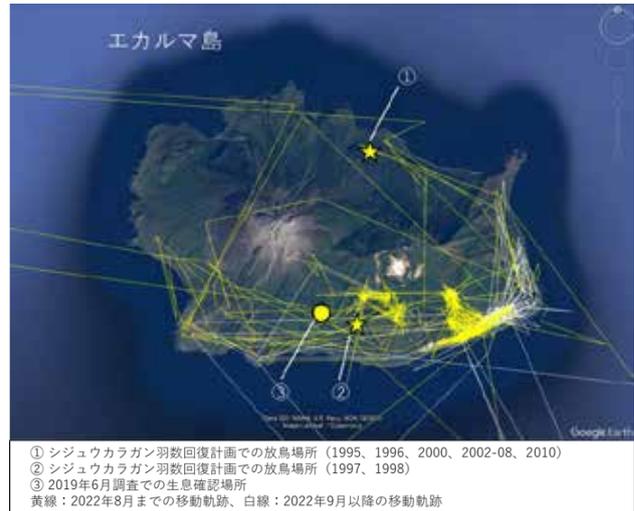
2021年12月13日にシジュウカラガンの中継地となっている秋田県大潟村で、日本雁を保護する会、山階鳥類研究所らによる調査で、9羽（首環型5、ハーネス型4羽）のシジュウカラガンに発信器が装着され、その動向を電波で追跡する調査が行われてきた。その結果、これらの内の2羽が、宮城県北部の仙北平野で越冬後、2022年春に、後述の保護プロジェクトにおいてシジュウカラガンが放鳥された千島列島エカルマ島へ渡り、繁殖期間は同島に留まり、同年秋に再び越冬地の宮城県北部まで渡ったことが確認された。このことにより、エカルマ島で放鳥された個体が、同島で繁殖を始め、それらの群れが定期的に日本へ渡っていることが確認された。またエカルマ島の南東部が主要な生息地や営巣地の可能性が高いことが明らかになり、今後の個体群管理にとって重要な情報が得られた。



今回判明したシジュウカラガンの渡りルート



首環型発信器を装着したシジュウカラガン（2021年12月13日、秋田県大潟村）



エカルマ島におけるシジュウカラガンの利用軌跡

シジュウカラガンとは

／研究の背景

学名 *Branta hutchinsii leucopareia*

カモ目カモ科 全長 60cm

環境省のレッドデータブックの絶滅危惧 IA 類種の保存法の国内希少野生動植物種

- かつてはアリューシャン列島と千島列島で繁殖し、アリューシャン列島の個体群は北アメリカ西海岸に、千島列島の個体群は日本に渡って越冬していたが、毛皮目的で繁殖地に放されたキツネ類のために姿を消し、20世紀中頃には絶滅したと考えられた。千島列島においては、中部千島で営巣し、日本で多数越冬していたが、20世紀初頭に当時日本領の千島列島に毛皮目的で放された多数のキツネに捕食されて減少し、絶滅したと考えられた。
- その後1963年にアリューシャン列島の小島で少数が生存していることが確認され、アリューシャン列島産の個体群をもとに、千島列島で繁殖し、

日本に渡来する個体群を復活させる取り組みが、日本雁を保護する会の呼びかけで1980年から始まった。これは日ロ米3カ国国際共同事業に発展し、1995年に八木山動物公園等の支援で、かつての繁殖地の千島エカルマ島での放鳥を開始し、やがて日本へ渡る群れが復活した。化女沼や蕪栗沼などへの飛来数は約1万羽まで増加した。2021年1月には歴史的越冬地だった七北田低地（仙台市福田町、多賀城市の水田地帯）で86年ぶりに小群が確認された。

- これまで放鳥地でのエカルマ島をはじめとする千島列島での生態調査は行われておらず、営巣の確認もされていなかったため、放鳥個体の繁殖地が千島列島のどこであるかは不明だった。放鳥以降の記録としては、2018年8月にエカルマ島に近いシャシコタン島沖合で幼鳥を多く含む26羽が観察され、2019年6月にはエカルマ島で数羽が確認され、それ以外にオンエコタン島やパラムシル島で断片的な記録があったのみだった。

この件についての問い合わせ先

※写真のデジタルデータをご希望の方もお問い合わせください。

日本雁を保護する会担当

Tel/Fax.0228-32-2004

山階鳥類研究所研究員 澤祐介

Tel.04-7182-1107

eメール：sawa@yamashina.or.jp